



第134回研修会
「美術鑑賞」(その49)

2015年2月12日(木)

箱根・熱海の 美術館を訪ねて

■岡田美術館
神奈川県足柄下郡

■MOA美術館
静岡県熱海市



岡田美術館の「風・刻」と名付けられた風神雷神を描いた壁画の前で

東洋美術の優品をコレクションする箱根と熱海美術館を訪ねました。美術研究家の沼辺信一さんを講師にお迎えし、岡田美術館では開館一周年記念展、MOA美術館では尾形光琳300年忌記念特別展を鑑賞しました。



岡田美術館外観と足湯カフェ



学芸員・塩谷さんから見学前に見どころを教えていただいた

岡田美術館

参

加者46名を乗せたバスは渋谷を発ち、一路箱根の岡田美術館へ。車中で沼辺さんから次のようなお話を伺いました。

「岡田美術館は2013年10月にオープンしたばかりの美術館で、歌麿の巨大な肉筆画『深川の雪』が大変な話題を集めました。実業家の岡田氏が15年ほど集めたコレクションは、質の高いものばかりです。日本画を展示するには、相当数を持っていく必要はありません。保存の観点から長期間同じ作品を展示できないこと、日本独特の感性で

ある季節感を活かした展示をするためです。真冬に朝顔はありえないですよ。つまり頻繁に展示替えをする必要があるわけです。

とはいえ、資金があるからといって多くの作品を集めることはできません。バブル後の美術マーケットのように、市場に美術品が多いタイミングで財力があることが作品収集の重要な点です。岡田氏が買っていないければ、おそらくこれらのコレクションは海外に流出してしまったのではないのでしょうか。日本には、まだまだ世に知られていない、いわゆる「お宝作品」が眠っているといわれています。増え続けていくであろう今後の岡田美術館のコレクションも楽しみです」

美術館概要

実業家・岡田和生氏が収集した日本・東洋の美術品を公開している美術館。古くから日本で受け継がれてきた美術品を守り、美と出会う楽しさを分かち合い、次代に伝え残したいとの願いから作られました。全5階からなる展示面積は5,000㎡にも及びます。開館一周年記念展では、横山大観の最大級の富士「霊峰一文字」、久々の公開となる速水御舟の「木蓮」などを鑑賞しました。なお、昨年話題となった歌麿の「深川の雪」は、4月3日から8月31日の間再公開されるそうです。

美術館 コレクション



横山大観
「霊峰一文字(部分)」
(岡田美術館蔵) 大正15年(1926)

約9mに及ぶ長大な画面に、湧き起る黒雲の中から姿を現した霊峰富士の雄姿を描いたもの。大正15年、数え年59歳の横山大観が水墨の妙味を發揮して描いた力作。人形浄瑠璃の舞台の引幕として使用後、ほとんど世に知られないまま秘蔵されていた。



速水御舟
「木蓮(春園麗華)」
(岡田美術館蔵) 大正15年(1926)

32歳の御舟が義兄邸で開いた最初の個展に代表作「炎舞」(山種美術館蔵)など17点の1つとして出品された作品。単なる写実を超え描く対象の存在感を深くとらえ、厳かに格調高く写し出した名作。

昼 食を挟んで、一行は次の目的地熱海を目指します。「今回の

展示会の開催期間はわずか一カ月。光琳の二大国宝を見るために寒い時期を選んで美術研修を行いました」との沼辺さんの発話から午後の研修が始まりました。

「尾形光琳の二大傑作として国宝の『紅白梅図屏風』と『燕子花図屏風』を同時に鑑賞することのできる千載一遇のチャンスです。紅白

梅や燕子花の開花する時期に合わせ、年に一度は公開されていますが、同時公開は1956年4月以来、実に56年ぶりのこととなります。もしかしたら、次回の同時展示はもう見ることができないかもしれないですね(笑)。それぞれ数奇な運命をたどった二つの大傑作が、戦災を免れて無傷で300年後まで残りしかも、向かい合せに並ぶのは、とても珍しく贅沢なことです。一人の作者が描いた作品の、違った世界観を見比べてみてください。」



ムア広場より
MOA美術館を臨む

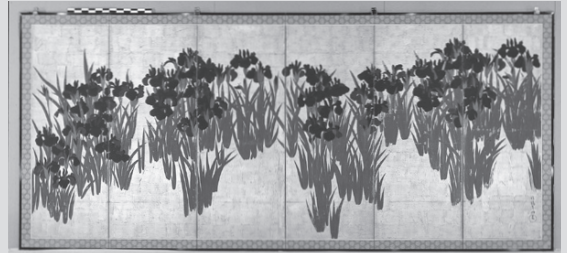
美術館概要

「美で多くの人をたのしませ、人間の品性向上に寄与する」という岡田茂吉氏の理念のもと創立された美術館。国宝3件、重要文化財65件を含む約3,500件のコレクションは、絵画、書跡、工芸、彫刻等多様な分野にわたっています。光琳の名品とそれに触発された日本の近代美術の流れをたどる尾形光琳300年忌記念特別展「光琳アート 光琳と現代美術」を鑑賞しました。4月18日から5月17日には根津美術館にて「光琳デザインの秘密」と題した展示会が開催されます。二大国宝が同時公開されますが、国宝以外の展示内容はMOA美術館と異なるそうです。

美術館 コレクション

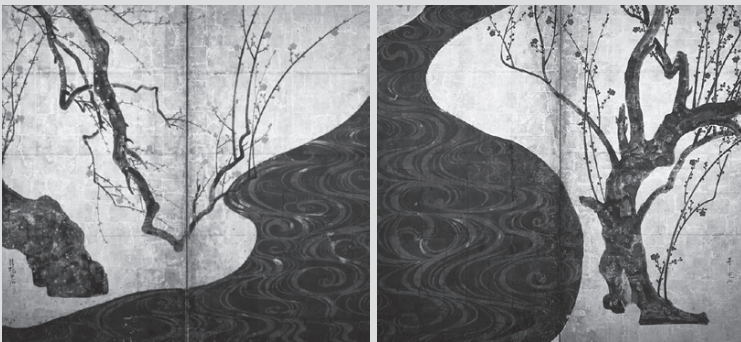


尾形光琳
国宝「紅白梅図屏風」
(MOA美術館蔵) 江戸時代(18世紀)



尾形光琳
国宝「燕子花図屏風」
(根津美術館蔵) 江戸時代(18世紀)

光琳40歳代中ごろ、法橋叙任後まもない頃の作品とされている。伊勢物語東下りの八つ橋に取材し、金地に群青と緑青でかきつばたを描いている。同じ花群を反復して画面が構成されていることから、型が使用されたと推測されている。



光琳の晩年に制作されたと考えられている作品。画面中央に水流を配し末広がりの曲面を作り上げた構図、光琳梅といわれる花卉を線描きしない梅花の描き方や蕾の配列、幹のたらし込みなど優れた要素が結集した光琳の代表作。

MOA美術館では光琳屋敷(復元)と二大国宝にたっぷり時間をかけて見学しましたが、まだまだ見たりないと後ろ髪をひかれながら帰途に着きました。

「同じ金屏風でも、金の色が違って見えませんでしたか? 燕子花の後ろで輝く暗れやかな金と、紅白梅のまわりの渋い翳りを帯びたような金。人生を暗示しているようにも見えました。研究者は燕子花図屏風を初期の仕事、紅白梅図屏風を最晩年の仕事と発表しています。金の輝きの違いからなるほどそうかもしれないと感じました。金屏風というのは本当に微妙な作品ですね。光の当たり方によって千変万化する。見ている向きによっても刻一刻と変化していく。本当に良い作品は見飽きません。皆さんがもう一度見たいと思っていたら、この研修は成功ですね。ぜひ再訪してください。また次回お会いしましょう」との沼辺さんの言葉で研修を終えました。